リニューアル赤れんが庁舎は何を物語るか?その2

杉浦　正人（すぎうら　まさと）

札幌建築鑑賞会　代表

1959年、愛知県生まれ。1982年、北海道大学教育学部卒業（社会教育・生涯学習論）。1991年、「わが街の文化遺産の再発見」をテーマとして学ぶ市民グループ・札幌建築鑑賞会を発足させ、代表を務める。「大人の遠足」「古き建物を描く会」などの行事を続けてきた。2023年から北海道新聞別刷「さっぽろ10区」に「札幌建物探訪」を連載。2024年、『さっぽろ探見 ちょっとディープなまち歩き』を刊行（北海道新聞社）。

前回に続いて

北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）が昨年７月にリニューアルオープンしました。赤れんが庁舎の価値を二つに分けて鑑みることとし、前回は「建物そのものの価値」を振り返りました。今回は「建物が周辺にもたらした価値」について述べます。

先に結論的なことを申し上げると、赤れんが庁舎の周辺は、庁舎との関わり合いで歴史を経ながら価値を重層的に高めてきました。以下、価値を物語るできごとを年代順に掲げ*1、それぞれの位置を右の地図に示します。

① 明治期　敷地の空間構成
② 大正期　北３条通の整備
③ 昭和期　周辺の建物によるリスペクト
④ 平成期　北３条広場と再開発

赤れんが庁舎は北海道の心臓部であり、札幌の街は庁舎を中心として発展してきました。庁舎の存在によって、その周辺の環境や景観が豊かに形成されてきたともいえます。時系列にしたがって眺めていきましょう。

赤れんが庁舎の周辺（元図：札幌市地図情報サービス）

赤れんが庁舎が周辺にもたらした価値

(1) 明治期　敷地の空間構成

赤れんが庁舎は近世城下町における“お城”に匹敵します。城下町を前身とする都市では近代以降も城郭がランドマークとなり、都市の風格を印象づけてきました。庁舎の敷地は城郭の役割を果たしてきたかのようです*2。

＊1　日本の近現代は必ずしも和暦の区切りで歴史的に区分できるものではないが、周辺のできごとを取り上げたところ、たまたま四つの和暦のそれぞれに属した。

＊2　前身の開拓使も含め、北海道庁が歴史的に果たしてきた役割に照らすと、封建社会の城郭へのなぞらえはあながち飛躍してもいないと考える。果たした役割は肯定的意義だけでは語れないが、紙幅の都合で深入りは避ける。

敷地には北海道の現庁舎や道議会議事堂も含まれますが、面積は約58,000㎡に及び、札幌の中心部における格子状（碁盤目状）の街区の四つ分を占めています。

注目すべきは敷地の広さのみならず、赤れんが庁舎が格子状街区の街路の交点に位置づけられたことです。四方の通りのアイストップに位置して、視覚的な効果を高めています。札幌の中心部では抜きんでた立地といえます。

さらなる特徴としては、空地や緑地が大きな割合を占めていることです（下図参照）。敷地は開拓使札幌本庁舎の時代から縮小しながらも受け継がれ、赤れんが庁舎の建築に伴って池も掘られました。庁舎をお城の天守に見立てるならば、前庭の池はさながら内堀です。

この池は防火用に設けられたといわれますが、ジャポニズムの影響を受けた西洋画の庭園をも彷彿（ほうふつ）させます。周囲は明治時代の育樹の面影をとどめ、風致上の効果ももたらしてきました。

赤れんが庁舎と前庭の配置図
出典：道庁赤れんが庁舎前庭「木育」樹木マップ
（北海道のオープンデータから一部を利用）

(2) 大正期　北３条通の整備

赤れんが庁舎の東正面から東へ伸びる通りは、イチョウの並木によってヴィスタ（見通し線）が形成されています。(1)で述べた視覚的な効果をさらに高めたものです。このイチョウは1925（大正14）年に植えられました。道内に現存する街路樹としては最古といわれます。その前年、通りはいわゆる「木塊」によって

植樹間もない頃の北３条通（札幌市公文書館所蔵）

舗装されました。木塊は道産のブナ材を15cm×９cm×8.5cmのブロックにして、防腐処理をしたものです。札幌における舗装道路の先駆けとされます。

ここで特筆したいのは、並木を植えて「歩車分離」を実現したことです。札幌における近代的な街路としても先駆けの一つとなったのではないでしょうか*3。歩道側はアスファルトで舗装されました。

イチョウは東京で荒川の堤防用に育てられていたものが譲り受けられ、当時樹齢19年の32本が植えられました。百年を経てこの並木が成長して、庁舎の前庭に続いて緑のボリュームを増しています*4。札幌の中心部を特徴づける格子状の街区は、ともすれば単調な景観になりがちです。並木道は、赤れんが庁舎の存在感を際立たせたのみならず、周辺の空間にも心地よさを加えました。

ところで、イチョウ並木というと、東京で1923（大正12）年に植えられた明治神宮外苑が知られます。並木道の正面にランドマークとなる「聖徳記念絵画館」を立地させた構成は、近代的な都市計画の成果でした。北３条通のイチョウ並木は神宮外苑をモデルとしたように思われます。折しも1923年、東京は大震災に見舞われ、復興のためさらに都市計画が進められました。火に強いとされるイチョウが北３条通に採用されたことには、このような時代背景も窺（うかが）えます。

＊3　緑地帯による歩車分離の道路としては、北海道帝国大学構内における現在の北13条通が札幌における草創とみられる。1922（大正11）年頃、整備された。欧米の都市事情に精通した教授陣の知見が反映されたものであろう。北大の並木もイチョウだが、当初はカエデやサクラだったらしい。

＊4　現在のイチョウの数は29本だが、当初からの現存は27本とみられる。

⑶　昭和期　周辺の建物によるリスペクト

赤れんが庁舎の敷地の北側に隣接して「日本生命北門館ビル」という12階建てのビルが建っています。1982（昭和57）年の建築で、併設の公開空地は1983（昭和58）年、第１回札幌市都市景観賞を受賞しました。授賞理由を以下、引用します（原文ママ）。

１.本市初の個人施行の再開発事業により、植樹、ベンチ、照明灯、屋外小ギャラリー等をとり入れた、やすらぎのある公開空地と歩行者空間を創出している。

２.建物の外壁を旧道庁庁舎の屋根の色に合せたり、ポケットパークから道庁庭園をながめた視覚的広がり等、周辺の景観上の配慮がなされた公開空地となっている。

札幌の中心部にあって、動線や視線を意識しつつ、ゆとりのある空間が民間の土地に設けられました。これもまた赤れんが庁舎のたまものといえましょう。この公開空地は、建築基準法に基づく総合設計制度*5を適用した札幌における先駆けと聞きます。

ビルそのものも、庁舎へのリスペクトを伝えています。タイル貼りの外壁を庁舎の屋根*6の色に合わせたというのは、言われてみて初めて気づきました。煉瓦（れんが）の色ではなく屋根の色に合わせたのは慧眼（けいがん）です。それでいて、タイルはフランス積み*7で貼られています。赤れんが庁舎の煉瓦の積み方と同じで、隠し味を効かせたような心憎い演出です。

日本生命北門館ビル（左方）と公開空地

⑷　平成期　北３条広場と再開発

2014（平成26）年、⑵で述べた北３条通が道路から広場に変わりました。歴史的な木塊舗装を保全した上で、煉瓦を敷き詰めています。イチョウの植樹桝（ます）も植生に配慮して改善されました。デザインや素材には赤れんが庁舎へのオマージュが見て取れます。供給された煉瓦は江別・野幌産で、赤れんが庁舎の色合いに合わせて特注したそうです*8。

車両交通が除かれ、人が自由に歩けるようになり、催し物の空間としても再生しました。大正期の近代的な街路の先駆けが１世紀近くを経て、再び時代を先駆ける空間となったのです。

北３条広場は、隣接する民間企業の再開発事業による「公共貢献」によって実現しました。新たに建てられた「札幌三井JPビルディング」との複合的な事業です。このビルも建物を全体としてセットバック（壁面後退）させ（低層階はさらに後退させ）、カフェテラスを設けるなどして、ゆとりやにぎわいの空間を創っています。

歴史を思い起こすと、北３条広場は先駆けというよりは市民自治復権への第一歩というべきかもしれません。ヨーロッパ中世の自治都市では広場に役場や教会が面し、その広場が街の中心に位置して自治の舞台となったからです。

北３条広場と札幌三井JPビルディング（奥）
商業施設「赤れんがテラス」

＊５　一定の公開空地を設けることを条件に建築物の容積率等を緩和する（高層化を可能とする）仕組み。建築物が密集する都市の中心部において公共的な空間の確保、促進をねらいとする。

＊６　赤れんが庁舎の屋根は宮城県産の雄勝石（おがついし）を用いた天然スレートである。1968（昭和43）年の復原改修に当たってもこの石材を再び用いた。

＊７　煉瓦の長辺と短辺を同じ段で交互に並べる積み方。段ごとに長辺のみ、短辺のみで積む「イギリス積み」に比べると手間がかかるが見栄えは美しいとされる。

＊８　笠康三郎氏のご教示による。煉瓦は米澤煉瓦株式会社（江別市）の製造で、同社は1968（昭和43）年の赤れんが庁舎の復原改修でも製品を供給した。

ちょっと寄り道　煉瓦は巡る糸車？

前回お伝えしたとおり、赤れんが庁舎の煉瓦は札幌近郊で焼かれました。白石村（現在の札幌市白石区）の「鈴木煉瓦製造場」などです。その煉瓦は、現在の豊平区西岡で昭和戦後期に建てられたリンゴ倉庫にも使われていました。

鈴木煉瓦は昭和戦前期には操業を終えていますが、戦後建築の倉庫で見られたのはわけがあります。煉瓦はもともと、月寒（札幌市豊平区）にあった陸軍の施設に用いられたものでした。戦後解体されたときにリンゴ倉庫で再利用されたのです。

その倉庫も2014（平成26）年、解体されました。解体時、その煉瓦が再び（三たび）別のところで使われたと耳にしました。持ち主だった方に伺うと、赤れんがテラス（札幌三井JPビル）のあたりに運ばれたとのことです。探したところ、２階の飲食店（カフェ）の外装に煉瓦が貼られているのを見つけました。古そうな煉瓦です。

断定はできませんが、もし赤れんがテラスで使われているとしたら、ここしかないと推理しました。これが鈴木煉瓦産だとすると、赤れんが庁舎の煉瓦と同じ出自です。１世紀余りの歳月を経て、糸車のように巡り巡って、最（再）接近したことになります。

赤れんがテラスの２階カフェ外装の古そうな煉瓦

おわりに

２回にわたり、赤れんが庁舎とその周辺を探訪してきました。庁舎のリニューアルでは、館内の展示も大幅に一新されました。展示自体も興味深いのですが、小稿ではその内容に触れることはできませんでした。展示を建物や周辺と関連づけることで、新たな気づきがあるかもしれません。

庁舎ではさまざまな催しも繰り広げられるようになり、ガイドツアー（有料）も実施されています。催しやガイドさんとの交流もまた、建物と相まって魅力を弥増（いやま）してくれるでしょう。願わくは、“年間入場券”のような仕組みができて、繰り返し訪れる人が増えることです。

赤れんが庁舎とその周辺は、相互に関わり合って価値を高め合ってきました。小稿をきっかけとして、赤れんが庁舎を観覧して周辺にも足を延ばし、周辺を歩きながら庁舎に足を向けていただけたら嬉（うれ）しく存じます。

主な参考文献
・越野武『札幌クラシック建築追想』2024年
・公益社団法人土木学会北海道支部ウェブサイト
https://www.jsce.or.jp/branch/hokkaido/jsce-hc.html「選奨土木遺産」道庁正門前木塊舗装・銀杏並木
・札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫38 札幌の樹々』1986年
・公益社団法人日本造園学会北海道支部ウェブサイト
https://www.hokkaido.jila-zouen.org「北の造園遺産」第６号「道庁前イチョウ並木」、第40号「道庁赤れんが庁舎前庭」
・岩沢健蔵『北大歴史散歩』1986年
・越澤明『東京都市計画物語』初出1991年
・札幌市「第１回札幌市都市景観賞」パンフレット1983年
・札幌市北３条広場［アカプラ］ウェブサイト
https://www.kita3jo-plaza.jp/index.asp